

---

# ただ春の夢のごとし

Ander 森

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ただ春の夢の「」とし

### 【Zコード】

N4397A

### 【作者名】

Andr 森

### 【あらすじ】

良くなれた休日に掃除をしていた結と頼。すると、突然クローゼットから光が・・・！次の瞬間、二人の目の前には見慣れない景色が広がる。なんとそこは幕末、土佐だった！！

## その1 タイムスリッパ（前書き）

勉強不足なもので、なるべく歴史に忠実であるつもりとしていますが違う部分もあると思います。すみません。よかつたら教えてください。

## その1 タイムスリッパ

1 タイムスリッパ？

今日は土曜日。

まさに、本日は晴天なり！！と叫びたくなるような天気だ。

「わあ～今日とってもいい天気だね。」

彼女の名前は、じない 時内ときうち 結ゆう。

15才の高校1年生。

好きな教科は日本史・国語。

好きな食べ物はジャガイモ料理といいいくふつうの女の子。

「だから、今日は掃除するんだよ。ねーちゃん！  
ゴロゴロしてないの！！」

彼は結の弟の時内じない 賴たのむ。

13才、中学1年生。

好きな教科は英語・数学・英語。

かなり成績優秀。

「そんなこと言わないで～～～」  
「いやいやいや言わないでさつさと動く！」

ねーちゃんはまず、自分の部屋ね！…「  
すかさずホウキとゾウキンを渡す。

ぶつぶつ言いながら、階段を上つて自分の部屋へ。  
まず、結の部屋にはいると見えるのが大きな本棚。  
文庫から参考書まで所狭しと並べられている。  
机の上にはパソコンとパソコンポ。  
奥にはベッドと少し大きめなクローゼット。

ほっぺを真ん丸にふくませ、手を動かしながら言つ結。  
「何で私が掃除なんかしなきゃいけないわけ？  
今日は宿題が終わつたから、  
インターネットと読書でもしようと思つてたのに…。」

「久しぶりにクローゼットの中でも掃除するか。  
何これ？結構思重いじやん。  
頼、ちょっときて手伝つてー」  
大声で叫ぶ。  
下から、頼が上ってきた。

その時だつた！！  
急にクローゼットから光が出て  
二人を包んでしまつた。  
そして、光の中の黒い穴の中に吸い込まれた。

「あれ~~~~~」

「わあ~~~~~」

そしてまた、光のあるところに放り出された。

上から頬がふつてくる。

「いつたあ~い。重いんだよ。速くどけ!..!..」

「ああ、『めん』『めん』」

ゆづくじと結の上からどぐ。

周りを見渡した。

人がたくさん集まっている所を見ると、  
商店街のようだ。

でも変なのだ。

みんな成人式のように着物を着ている。

そして、結と頬の方をジロジロ気味悪そうに見ながら通りで行く。

彼らの頭をよく見るとマダガが結つてあった。

「ねえ頬。ここって一体どー?..」

「日光江戸村じゃない?..」

「人間つてワープできる技術もつてたっけ?..

「まだないよ。」

「じゃあどこや、ここは?..」

「こんな奇妙なところ少なくとも今の日本にはないと断言できるね。

「「「「「」」」」

「あ～もしかして！……」

「へつどじしたの？」

「ちょっと待つて、ねーちゃん。」

近くにいた人に走り寄つて行つた。

結が見るとこり、声をかけられた人はかなり引いてるよつに見える。

一、二言話すと頬がもどつてきた。

「やつぱりね。

聞いたら今、嘉永5年だつてさ。」

「ふ～ん。そなんだ。嘉永と言つたら、天保・弘化・嘉永・安政の嘉永だよね！！

・・・・つてちょっと待て・・・今江戸時代だっけ？

「どうもそうみたい。」

「タイムスリップしてしまつたといつこと！？」（ガーン）すでに結、ムンクの叫びの状態で止まつている。

「ねーちゃん。それを言つならタイムスリップだけど・・・。あと、ここは土佐だつて。」

今まで止まつっていた結の目が光つた。

「土佐と言つたら山内容堂（豊信）、坂本竜馬、武市半平太、中岡慎太郎とか有名だよね。それと・・・・。」

「ストップ！ねーちゃん。落ち着いて。」

「会えるかな？」

「どうだろうね。日本は広いから。」「いや。会えるよ。絶対に！..」

「うん。うん。絶対そうだ！」

（あ～。始まつたよ。会つて決めてるなら、聞かぬきやいいのに・・・。）

「それより、ねーちゃん。わっしょい、見られてる気がするんだけ  
ど・・。」

「うん。それは私も感じた。でもどうするの?」

一番目だつているのは服だと思うけど、お金ないよ?」

「そうだよね。しょうがないから、とりあえず人気のないところ  
行くか」

結と頬が歩き出した。

「まて〜〜〜」

後ろを振りむくと役人らしき人たちが追つてくるのがわかった。  
結と頬は本能的に危ないことを察知し、全速力で走り出した。

〜あとがき〜

ここまでわたくし Andar の駄文を読んでくださりありがとうございます。

何せ初めてもので・・・・・。

「竜馬が行く」を参考にしながら書いています。  
これからもバシバシ書いていきたいと思いますので、  
よんでいただけるとうれしいです。(^o^)

## その2 坂本家

「ハアハア・・・逃げ切れたかなあ。」

「・・たぶん。はあはあ。」

結も頬も肩を上下に動かして呼吸をしている。

「怖かつた。刀、振り回して追っかけてくるんだもん。死ぬかと思った。」

今度は後ろからパツカパツカと馬の足音が聞こえた。女人が乗っている。

そして、結と頬の横で止まつてこっちをふりむいた。

そして乱暴に

「わたしについといで!!」といつ言葉を残し走り去つた。

結と頬は訳もわからず走つて彼女の後についてつた。人間の足が馬の足に追いつくはずがない。

特にマラソンが大の苦手な結にとつてはつらい。

女人人が乗つた馬は商店街を越え、

一件の屋敷の中にある馬小屋の前に止まつた。

そして、馬からハラリと降りた。

その姿はほれぼれするほどさまになつてゐる。

背も高い。だいたい172センチくらいあるのではないだろうか。

そして、彼女は切れ長の目で、骨董品を眺めるプロの目つきで、結と頬の頭の先から足のつま先まで丹念にみた。

彼女は結んでいた口を開いた。

「あたしの名前は坂本乙女。あなたたち、何でそんな奇妙な格好してるので？」

「名前は？国は？・・・・・・・・。」

次から次へと質問が滝のように流れ出る。

「ち・ちょっとまつてください。私の名前は時内 結です。」  
「は弟の頼。

なぜこんな格好をしてるかってこと・・・・。」

いつたん言葉を切る。

乙女の目が結を捕らえた。

（言つてしまおうか、どうしようか・・・・。）

結の瞳が左右に揺れる。

しばらく沈黙が続く。

乙女が答えを待っているのがわかる。

（ああ～～～この際こいつちやうれい。どうなつても知へらないーーー）

「実は・・・。」

「実は？」

「あの」

「あの？」

「その」

「いいかげんにはつきり言つてちょーだい！――  
いらっしゃってる。

「あ・はい！実は私たち未来から来たんですーー！」

沈黙・・・。

「は？？／＼ライ・・・？？？」

乙女の頭の上に、マークが浮かぶ。

「ずーっとずーっと先の時代のことです。」

「へえー。信じられないけど、その着物見ちゃうと信じないわけにはいかないわね。

さつきたの？」

「そうなんです。これからのこと姉と話してたら乙女さんが来た次第です。」

「じゃあ、帰る家がないってこと？」

「はあ。そういうことになります。」

「帰れるまで住みなよー。ついで」

「えつ！いいんですか？」

結の田が宝石のように輝いた。

「いいよ。困ったときこなはお互に様よーー！」

笑顔で答えた。

このとき、結と頬には『天使の微笑』に見えたそくな。

「とこりでこの先の世はどんな感じなの？」

「時代を変えたくないの、そんなに詳しくは言えないけど……。  
たとえば、この行燈あんじやう。」

頬は近くにあつた行燈を指す。

「普通、油がなくなつたら、それなきゃいけないですよね？」

「うん。」

「それに、風が吹けば揺れて消えちやう」ともあるし、なにより火事になりやすい。

しかゞし、未来の行燈はスイッチといつもの押すだけで明かりがついたり、

消えたりするんです！…すぐに油がなくなつて消えちゃうつて

ことないし…。

いいでしょ？？

「なるほどねえ～。『すいっち』だけ？…うん…すごいと思ひ。」

さつさらだまつていた結が口を開いた。

「あのー乙女さん。もしかして弟いますか？」

「うん。いるけど…・・・。」

「そして、その人の名前は『坂本 竜馬』ですか？」

「そうだけど…・・・。でも、どうしてわかつたの？」

乙女は肖像画の龍馬に似た細い目を見開いて答えた。

「龍馬さんって、じつちの世界では有名なんですよ。」

すると今度は目を輝かせていった。

「それ本当？？」

「もちろんです。」

「やつぱりそうでしょ？歴史に名を残すとは…・・・。さすが私が見込んで、鍛えて、育てた弟！」

一人の世界に入つて、感動している…・・・。

「よし！…ちょっとまつてつて…！」

屋敷の中に入つていった。

その後ろ姿を眺める結と頬。

自然に結の顔から笑顔がこぼれる。

「ねえ、頼。乙女さんっていい人だね~。」

「うん。そう思ひ。それにしても、まさかあの坂本竜馬の家に来てしまつとはね。」

中から乙女が出てきた。

「あのね。結ちゃん、頼ちゃん。父がうちに住んでいって。先の世のことは話すとややこしくなるから話さないで、火事で親を失い身寄りがないって言つておいたけど。それでいい?」

「「ありがとうございますーー。」」

頭を下げる。

「あなたたち。わからないことがあつたら、私を姉だと思つていろいろ聞いてねーー！」

「はいーー。じゃあ乙女さんが私の姉なら『乙女ねーさん』って呼んでいいですか?」

「もちろん。言いに決まっているじゃないつーー！」

結の肩を思いつきり叩いた。

「そついえばねーさん。馬術と剣術ができると聞いていますが、是非教えてください。」

頼も田をきりわせながら囁く。

「もうひと。いいよ。午後。私、空いてるから。」

「やつた～～～～！」

結がうれしそうに飛び跳ねた。

「あつがとつゝぞります。」

頼も答える。

いつって、彼らは坂本家の居候となつたのでした・・・。

## その2 坂本家（後書き）

それがしの乙女のイメージは氣の強い面倒見のよいねーちゃんって  
かんじなんですが・・・。  
表現できたかな?って思います。

### その3 あつたかい家族

日が少し傾き始めたころ、坂本家の庭には3つの陰があった。

「ハアハア乙女ねーさん。ありがとうございます。竹刀を振るのってこんなに大変なことだつたのですね。」

「でも、結ちゃん。そんなこと言つけど  
ちょっとしかしてないのに、馬にも乗れるようになつたし、  
竹刀も振れるようになつたじやない。  
これつてすゞこことよー！2人とも才能あるわ。  
もう少しだけ見てあ・・・・・・・。  
やばい！夕食作らなきゃ！..」

「私たちも、手伝います！」

「助かるーここにあるそれ取つて・・。」

「はーい。」



「ああ、腹減つたき・・・。」

男が言ひ。

この男、身長約172センチこの時代の人にしては大男である。  
外見は美男子とはとても言えないが、  
目が細く、たれている所が彼を人なつこつそつに見せる。

そつ。この男、坂本竜馬である。

彼は家への道を急いでいた。

目の前にはもう坂本家が見えてきていた。

「ただいま帰つちゅうーー！」

大きく良く通る声でそういうと、竜馬は中に入った。

すると彼の見たこともない男と女が乙女の夕食作りを手伝っていた。  
竜馬はすぐ隣にいた坂本家の下男、源一郎に聞いた。

「ありやあだれだ？」

「の方たちは乙女お嬢さんが拾つてきたのです。

なんでも、はやり病で両親を亡くしたらしく、

4日間飲まず食わずに歩いていたところを、乙女お嬢さんがかわ  
いそうに思つたらしく・・・。

なんと優しく成長された・・・・源一郎はうれしこです！」

ついには泣きだしてしまった。

「まさか、ととはなんとい？」

「田那様も田に涙をお溜めになつて、せむりがて来るよいつことおしゃつておつました。」

（家族が増えるのか・・・。ほれつちやあいこかもしけんな・・・。）

龍馬は思つた。

るか?「

八平が周りを見回す。

反対意見を言おうとする者は一人もいな」「ことをみとめるべく、結と頬の方を向き、あたたかい笑顔でいった。

「……とにかくだ。結殿と頬殿がよければ是非家族としてお迎えしたい」のだが……」

結のすんだきれいな目にじわっと涙が溜まる。

「ありがとうございます!」

「八平の恩は一生忘れません!」

やつして、竜馬家の食事は始まつたのであつた。

夕食が終わり、乙女の出してくれたお茶を飲んでいた、竜馬と春猪が時内兄弟の所に来た。  
春猪は竜馬の兄、権平の娘で13才。竜馬がかなりかわいがつている姪つ子である。  
興味津々に時内兄弟のことを尋ねてくる。

「おまんたち、どうから來たが?言葉が違つよつやナビ・・・。」

「ねえ。おねーちゃん好きな食べ物ある? 好きな遊びはー?」

「ハハ。そんないつきにやれると……。」結がたじろぐ。

「そんなこいつをこの質問したから結ちゃんも頬ちゃんも驚いてるじゃ  
ない！！」

乙女が自分のお茶を注ぎながら注意する。

少しの間、竜馬と春猪がだまる。結と頬がほつとした顔をする。

乙女はお茶を飲みながら考えた。

(「）の一人には本当の「」と話しても大丈夫かな？

結ちゃんも頼ちゃんもきっとワケを知った上で受け入れてほしいはずだもの。」

乙女が考え方をしているのを見計らつてまた、竜馬と春猪が質問攻めが始まった。

ピキッ

結の頭の血管が切れた。

「あ～～～～。」さこねー。」の際、いつかまたね。

私たちは未来から来たの。だから当然土佐弁は使えません！！」

頬が頭を包える。

龍馬と春猪が首をかしげる。

「未来って言いつのば、これから来るはずのと先の時代のことよ。」

「でも、ねーさん。ほがなことはありえないことだろ。」「私もそう思つたんだけど、あんたの名前も知つてたし、

それに、何よりも2人の持ち物を見せてもらえば納得すると思つわよ。」

竜馬と春猪が結と頬を見る。

頬が立ち上がり、

用意してもらつた結との二人部屋から未来の物を包み込んだ風呂敷を運んできた。

中から結がワンピースを取り出した。

「へ～。こりゃあー奇妙な服だな～。」

「ねえ～結ちゃん。春猪、着てみたいな～～。いい？」

「いいよ。」

着るのを手伝つてやる。

「できた～～春猪ちゃん、かわいいよ。似合つてる～～。」

うれしそうに春猪が飛び跳ねる。

それを見て何を思ったのか、頬が頬を淡いピンク色に染めた。

### その3 あつたかい家族（後書き）

やつとり話がかけた～～。

実は結ちゃん。なんせタイムスリップした時、  
掃除中だったので、手に持っていた物まで持つて来ちゃったんですね～。

それは「浪士組 新撰組のすべてがわかる本」、

「幕末倒幕のすべてがわかる本」、

「世に棲む日々」（司馬遼作）

使ってないノート数冊、だそうですよ。  
あまりにも近い未来が書いてあって危ないので、  
いつも風呂敷に入れて持ち歩つてるそうです。（^\_0^）  
かなり長くなると思います。

末永くよろしくお願ひします。  
よかつたら感想ください。（三。一。） m

#### その4 協力のしるし

あつという間に数ヶ月を過ぎた。

その間に時内兄弟の剣術、馬術はとどまるところを知らず、ついに乙女を超えてしまい、今は龍馬に稽古をつけてもらっていた。

「ほがーに、竹刀を振り回したいのなら、田根野道場に入門したらがやき。」

それはグットアイデアとばかりに一人の顔がパツと光った。でも、すぐに結が顔を曇らせた。

「道場つて女、だめなんでしょう？」

「おんしなら男より強いし、なんぢやーがやないだ。第一女に見えない。」

「つそんな！竜馬兄さん。かなり失礼だよ。それ……確かに、この時代の女人にしては背は高いし、肩幅も広い、肌も白くないし、

それに・・・」

「やき、男装すればばれんつて！――」

「男装・・・。」

（それいいかも やつてみたかったんだよね～。

それに男装すれば竜馬兄さんについて行けるし、有名人にもえる・・・。これつて一石二鳥だよね！――）

「竜馬兄さん。私、男装する！――」

自分で言つておきながら、竜馬がポカンとする。すぐに自分の言つた言葉を訂正を入れる。

「ちゅちゅくとまつた。さっきのはてんじう（冗談）ちやー…」

「もう私決めたの。昔、龍馬兄さんが着てた着物ちょうどいいー…」

「てんじう（冗談）だとゆづちゅうわづ。忘れてくれ、な?」

「つるさいな！決めたって言つてるでしょ！分かつたらサッサと持つてくれる…！」

「はいっつー…！」

「ソソソと龍馬が取りに行つたのを見て、結が満足そうな顔をした。

袴を龍馬に教えてもらいながら着付ける。

そこにはいたずらぞかりの少年が姿を現した。

「女物よりずつーと動きやすいんだねー！気に入つた（^ ^ ^）」

かなり上機嫌にくるくるんである。

結が部屋を出よつとした。

「おい、どこへいくに？」

あわてて結に龍馬が問う。

「決まつてゐるじやん。権平兄さん（龍馬の兄）のとこりだよー…」

行つて、日根野道場に入りたいつてお願いするの。」

当たり前だといふ顔をして説明する結に龍馬は信じられんといふ顔をした。

「権平兄さん、失礼します。」

結が権平の部屋に入つた。

「結・・・・・か？」

権平が驚く。

なぜなら、正面には結の声をした少年がいたからだ。

その少年（結）は一二二二口しながら、権平の前に座ると説明しだした。

ダメだ！

お願いです。一生のお願い!お願いお願いお願いお願いお願い

「女子が男の格好をするとは、断じて許せん！」

「そんなこと言わないで、おねがいおねがいおねがいおねがいおねがい！」

ついに権平はため息をつき、結を見た。

……じゃあ聞くが、おまえが道場で男になると誰がいる？  
女を捨てるということだぞ。どんなことがあればとも、決して武士道から逃げられん。

結はその澄んだきれいな目で権平を見つめ、ゆづくつとうなずいた。  
「はい。もちろんでござります。」

権平はやれやれという顔をし、筆で和紙に何かを書いた。  
そして、それを結に見せた。

そこには“跡”の一文字が書いてあつた。  
あと

「結、男としてのおまえにはの名をやうやく。

おまえがビリに行ひやうやく、ビリにはおまえが女であつたところ  
跡がある。

これがわしができるおまえへの協力のしるしだ。

結の目頭が熱くなつた。



#### セの4 機知のしゆこ（後書き）

そんなこんなで結は男装してしまいました。  
これからどうなるのかな。

“○(\*○)○”ウキウキ

## その5 日根野道場

「「よろしくお願ひします……。」」  
結と頼は深く頭を下げた。

権平からの紹介状を見終えた道場主、日根野弁治はフムと言つた。  
しばらく結と頼を穴悪ほど眺める。  
そして急に立ち上ると来いと言つよつた手をして歩き出した。

(ついて来いつてことかな?)  
あわてて結と頼は弁治を追つた。

広い廊下を歩いて連れてこられたのは道場であつた。  
道場主である弁治が来たせい引き締まつた空気を感じさせる。  
( (気持ちいい!-) の感触- ) )  
結と頼は感じた。

そんな感受性豊かに感じているところを容赦なくぶつ壊し、  
弁治は結と頼に試合を言い渡した。

試合は終わった。

「頼。どうだつたと思つ?」  
「そんなの僕にだつて分からぬよ。日根野先生に聞かなくちゃ。  
」  
不安そうに一人は顔を見合わせていた。

その試合を見て、弁治は驚いた。

(「一体」の2人は何者なのか？)

聞いたところによると、本格的に剣術を始めたのは最近だそうだ。  
これはまだまだのびる可能性が大きいにある・・・・。  
よしつ目録の持っている鈴木と橋川をつけよう。)

「鈴木、橋川来い！」

「「はいっ」」

弁治が結と頼を指し示す。

「今日からこの2人の面倒を見てほしい。

名は時内結と頼だ。よろしく頼む。」

「「よろしくお願ひします！！」」

2人があわてて頭を下げた。

最初に橋川が結と頼の素振りを教えた。

「これで1000回するんだ。」

木刀を2人に投げてよこした。

(うつ・・。竹刀より重いっ！－)

結と頼が素振りを始める。

すると、橋川はふらりとどつかに行ってしまった。

しばらくして、辺にからともなくきゅうすと湯飲みを持って現れた。  
中からは緑茶のいいにおいではなく、ドクダミの鼻を突くようなにおいを漂わせていた。

(何？あの橋川とか言う人、人がひつしに素振りしてるっていうのに、  
どこほつつき歩つてかと思つたらドクダミ茶なんて持つてきて！)

!

(ねーちゃん。相当怒ってるなあ。

木刀に力が入ってピヨンピヨンしてるもんな。

苛立つ気持ちも分からなくはないが、やめた方がいいと思つた……。

(うよつと氣ぬきたくなぢやつた。)

どうせあの人見てないし……。いいよね？）

少し結は木刀に入れる力を緩めた。

「何やつてんだ！！もつと胸張つてーー！」

## 橋川の罵声が飛ぶ。

181

(なんた  
せやんと見てんかよ・・・・)

三、が結びたかと雖(い)ひ、

結の頭の後ろに手を添え口をこじ開けて、

正席に腰かけたエケタは、茶を流し込んだ。

一瞬詰は、河が起立したのが分かればかつた。

しかし、次の瞬間、味覚を感じる舌が急激に反応した。

口を押さえて飛び回った。

橘川が満足そうな顔をした。

「次、そんな顔したら、もっと濃いのにするから！」

それともう一度最初から、1000回すること・・・」

ガーンと思ったが、結はドクダミ茶のことを思つてガクガクつなぎいた。

(「こんなまずい物、口に入れられるなら1000回素振りやる方がましだ〜。」)

せつかく950回やったのに・・・トホホホ・・・。)

(「ねーちゃん。がんばれ・・・。」)

頬は結がドクダミ茶を飲ませているときに素振りが終わり、鈴木に教えてもらつてた。

鈴木は無口で鬼コーチ、今まで自分が筋がいいと思ったやつは徹底的にやらないと気が済まなかつた。

ゆえに、まだ彼のレッスンについて行けた者は未だないらしい。

鈴木は思つた。

(「この2人なかなかだ。先ほど教えたことをもう習得している。  
こんなやつオレは教えたの初めてだ・・・。特に跡の方がいい。」)

「こいつは激しい技を繰り出すのがうまい。頬はすばやい。そこを伸ばしてやろ〜。」

坂本家夕食時。

「乙女ねーさん! ちょっと聞いてよ・・・!」

「あのね、私と頬を橋川さんと鈴木さんって人が見てくれてんだけど・・・。」

「橋川さんってすんじい酷いんだよ! 一だつて・・・。」

「

今日も元気な話し声がした。



## その5 日根野道場（後書き）

元にちは！！

今回オリジナルキャラクター出しました。

橘川さんと鈴木さんです。

たふん次ぐらいまでしか出ないと思へんですが

では、また次の話で！！

## その6 旅立ち

メキメキメキとそんな音を立てる」とく結と頬の剣さばきは成長していた。

年末になる頃には2人とも師範である橋川を倒し、鈴木から一本取るまでになっていた。

竜馬も力をつけ、正月の試合では鈴木を一網打尽に倒していた。それを聞いた権平は喜んでお礼のある提案をしに日根野道場に行つた。

弁治の前に座っている権平が口を開いた。

「うちの竜馬を江戸に遊学させようと思つておるのでですが・・・」「それはいいことですね！実はこちからも言わないと困つたところでした。」

「そうでしたか！！」

権平が驚きの声を上げる。

「どうせ行くのなら、大流儀をまなぶのがよろしいでしょ。わしの知り合いに北辰一刀流で千葉周作先生の弟、真吾先生と言う方がいらっしゃる。

その方なら紹介状を書いて差し上げられるのだが・・・。」

権平が頭を下げた。

「ぜ、ぜひお願ひします！！」

「それとうちで預かっている跡と頼のことだが・・・。」「はー。」（？）

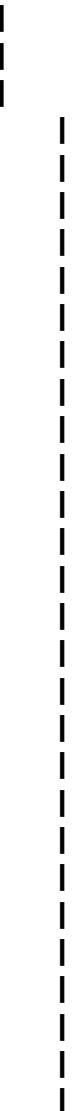
「ぜひ彼らにも田舎剣術でなくちゃんとした剣術をやらせたい。金はうちで出しましょ。一緒に行かせてはどうだらうか？」

権平はパツと口を開かせ、興奮気味に言った。

「そうさせましょ！…それは3人とも喜ぶことでしょう。  
しかし、金の方は私に出させてください。」

そして、3人の江戸遊学は決まったのだった。

その時ちょうど乙女の入れた緑茶を飲みながらくしゃみをしていた。



竜馬、結、頼の3人は嘉永6年3月17日江戸へと旅発った。

慣習により、親戚、知人、道場仲間が領石まで見送りに来た。

竜馬は一人でこれから故郷になるであろうこの城下町を  
しっかりと目に焼き付けながら歩いていた。

頼は道場仲間とワイワイふざけながら歩いている。

結は困った顔をしながら女たちに囲まれながら歩いていた。

結と少しでも目が合うとキャッと黄色い声をあげるのだ。

急に横を歩いていた鈴木が結に話しかけた。

「おまえ両手に花だな～。本当に！～！」

結の周りを見ながらため息をついた。

「そういう風に言つて、からかわないでくださいよ～～！」

ますます結の顔が困つてきていった。

なぜこんなに結の周りに女が群がつているのかといつと、ある雨の日。

結が傘を差しながら歩いていると女の声がした。

「やめてくださいーーー！」

そちらの方を見ると若い女がチンピラにからまれていた。

結は急いで刀を抜き、女とチンピラの間に立った。

「ちょっと兄ちゃんどいてくれねーかい？そいつはオレの獲物だ。

「女性を好き勝手に傷つけるなんて許せない・・・。」

「ひーせーどけつてんだよーーー！」

急にチンピラは結に斬りかかってきた。

それ受け止め、チンピラの刀を跳ね上げる。

そして、チンピラがバランスを崩したところを峰打ち。カチャッとう結の刀をしまう音がしたとおもいつと、ドサリと音のチンピラが倒れる音がした。

「娘さん。大丈夫でしたか？」

結が心配そうに若い女に手を差し出した。

「はい。ありがとうございました。助かりました。」

立たせながら結は女の髪が濡れているのが分かつた。

「あつ。雨に濡れてしまつたようですね。」

これじゃあ風邪引きますよーーー！」

結はその女に着てきた上着を肩にかけてやり、差してきた傘渡してやつた。

「こんなー悪いです。私・・・。」

「ああ、気にしないで！馴れてるから。それではーーー！」

結は頭を手に乗せると雨の中に走り去つた。

女はピンクにきれいに染まつた頬に手を当て結の去つた跡を眺めていた。

この女の名前をお京といった。

それからといつも彼女は仲間の女たちを引き連れ、結の現れる場所に出没し結を困らせるのだった。

しかし結にはなぜこんなに多くの女が自分の周りにいるのか最後まで理解できなつたらしい。

ひつて竜馬、結、頬は江戸に夢を抱きつつ旅だったのだった。

## その6 旅立ち（後書き）

「んにちはー！」

毎度読んでいただきありがとうございます（。o^\_^o）。  
今回どうだったでしょうか？

題名と内容ちょっと違っていた気もするんですけど・・・。  
とにかく、結ちゃんは野暮天だ！！！ってことが書きたかったんですね。  
す。では、次話でお会いしましょうーーー。

## その7 FUTOZMUSHI事件

関所を抜け江戸の町に入る者の姿が3つあった。

「これが江戸か～～！活気が大阪とはまた違つていいね！現代にいればゼッタイ体験できなかつたよ。感激」

第一声を大きな声で結が飾る。

「結、興奮しそぎがやない。」

「うるさいよ・・・。ねーちゃん。」

竜馬と頬があきれたように結を見ながら言ひつ。

「は～い、そこ～～！私の名前は結でもねーちゃんでもなあ～～！跡大王という名前であーる。こともそう呼びたまえ！！アハハハハ。

ところでおー頬は有名人に会えると思ひ？」

「さあね。日本は広いからね。会えないんじゃない？」

「そんなことないよ！ゼッタイ会えるんだもん！！！」

結が頬をふくらませてぶんぶん言つ。

（ほんなら、聞かえきやいいがやき・・・。）

2人のやり取りを見ながら竜馬は思つた。

そして、結というガキを連れた一行は足をすぐ藩邸へと向けた。

藩邸で、必要な手続きが終わると、

今後生活するであろう部屋を見せてもうつた。

「わあ～きれい！」

結が歎声を上げる。

「相部屋は誰じゃ？」

竜馬が眉をひそめながら言つ。

「武市先生ですが・・・。」

「半平太か・・・。」

竜馬の顔が不満そうな顔をし、ため息をついた。

その夜、半平太に心酔しきつてゐる若者たちが半平太に対する竜馬の態度を聞いて怒り、布団蒸しにしようとした半平太の部屋（竜馬・結・頼の部屋もある）で、竜馬を待つていた。

「先生を馬鹿にするなんて・・・。ソレガシは許せません!!」

「同感!!」

「よつて我々は不届き者竜馬に天誅を加えます。」

「竜馬は昔からやうやう奴だから、私は怒つてはないのだが・・・。」

美男子といふ部品を持ち合わせた半平太は苦笑いしながら良く通る声で言つた。

「いや!先生が例えおつしゃつても私たちは許す」とができません

!—!」

その時、入り口の襖が開き、結、頼と禪一丁の竜馬が現れた。次の瞬間、一人の者が行燈の火を消した。  
それを合図に若者たちが声を上げて飛びかかつて來た。

時内兄弟は天誅（布団蒸し）の邪魔をしないように1人ずつ別に捕まっていた。

離せ～～～～！」

おひなしく捕まっている頬に対し、結は暴れた。

「おどなしくじで」

何にもしないから離せない言ひて人の！」

「離せば黙る！」

男が結婚を無視して言う

「中華人民共和國憲法」

(それつて太)

「アーニー」。

(みたいじやなくてそういうのーー)

ケツでニセよと待てよ……女たてにはれせや行けなしんたてた

私たちは、この世界で生きるためには、必ずやうやく、死んでしまう。

するとすぐに、ドタドタする音が消え、行燈がともされた。

絵と刺方角方される

と、「ヤバ」汚着かー「した」と「し

若者たちが布団の下で苦しんでいた龍馬を一目見ようと近づく。

の姿であった。

若者がなれ縁も棘も喫然とした  
そんな中、禪一丁で油を体に塗り皆が捕まえにくくしたあげく、  
半平太を身代わりにした竜馬は「ソコソコ」と部屋を出て行ってしまった

た。

それにならうよにして若者たちも半平太の上に積み上がった布団と共に去つた。

「あの～武市半平太さん？大丈夫ですか？」  
結が遠慮がちに聞く。

「どうぞ、水です。」

頬が湯飲みを差し出す。

受け取つた半平太は一気に喉に流し込んだ。

「ふはっ！ 苦しかつた。あいつらめ、調子に乗りあがつて・・・！  
だから私はやらなくて良いと言つたんだ・・・！」

そして、結と頬に気づいた。

「ああ君たち、見苦しいところを見せてすまなかつた。  
権平殿からは手紙をいただいておる。名はなんと言つたかな？」

「私、時内跡と申します。」

「僕は頬と言います。」

「そうか跡に頬。藩邸へようこそ。」

分からぬことがあるたら何でも聞いてくれ。」

半平太がほほえんだ。

「「はい！！」

2人が元気に返事をする。

「君たち、年はいくつなんだ？」

「兄が15で、僕が13です。」

「まだ、若いな。よし、私が勉強を教えてやろう。  
暇があるときおいで。」

「ありがとうございます！」

「あのお願いがあるんですけど・・・。」

結がモジモジしながら半平太に聞いた。

「うん？なんだ？」

「これに名前書いてください……」

結が持つて来てしまつたノートを半平太の前に差し出した。

「これにか？」

「はい。」

半平太は自分の矢立をを取り出すとササッと書き上げた。

「こんなのでいいのか・・・？」

「はい！ありがとうございました！」

（武市半平太だつて！！有名だもんね！サインもらちゃつた。ルン ルン ）

こうして、結のサインを集める趣味は幕を開けたのだつた。

## その7 FUTOZMUSHI事件（後書き）

「こんにちはー久しぶりですー！！  
今年のGW、皆さんはどこに行きましたか？  
私は群馬の草津温泉に行きました。  
気持ちよかったです。」

やつと江戸に来ました。

アイディアはバンバン浮かんでくるのだけど、  
打つ時間無くて・・・・。  
がんばります（↙○↗）／

結の幕末サイン帳

N.O.、1 武市半平太 （土佐藩、尊皇攘夷派）

## その8 夢桜

武市半平太。

江戸の遊学中に尊王攘夷派になり、土佐勤王党を結成。  
土佐藩内を尊皇派にしようとし、郷士であるにもかかわらず疾走。  
夢半ばに切腹を命ぜられ果てる。

そんな未来を抱えた彼は今、少年たち（？）に勉強を教えていた。  
半平太が教科書にしてるのは頼山陽の『日本外史』である。  
それを見ながら半平太の口から繰り出される言葉は巧みで  
彼に心酔する者が多いのを納得させる。

目の間には、かわいらしきまつげをパチパチさせながら、  
頼が真剣な眼差しを向ける。

その横でノートの筆記に追われる結は、  
シャーペンが無く大変そうだ。

部屋の隅では竜馬が鼻毛を抜きながら退屈そうに寝つ転がっている。  
その隣には刀を抱き、時々熱っぽく青年が目を向けていた。

「「ありがとうございました！」」

結と頼の声がした。

半平太の話が終わつたらしい。

結が立ち上がる。

「お茶、飲む人。手挙げて！……」

余談だが、結の入れるお茶は千利休も驚くほど天下一品である。  
平たく言つとおいしいのだ。

「ちょうど喉が渴いた頃合いだ。頼むかな。」

半平太が少し手を擧げる。

「ハーアー！僕のもー！」

頬は元気よく言つ。

竜馬はうるさいと言つ顔をしてに頼の方を一別すると、面倒くさそうに手を擧げた。

そんな中きょとんとしている青年に結がニッコリ笑いながら聞いた。

「お茶、お飲みになりますか？」

「はあ。お願ひします。」

結から視線をずらしながら青年はそう答えた。

その答えを満足そうに聞き、結は台所の方へ歩き出した。

台所に入つて、

まず、お茶を入れるために「湯を沸かすこと。  
現代ならばコンロの元栓をねじってひねれば火がつくが、  
この時代はそもそも行かない。」

火打ち石を使って火をつけるのだ。

土佐にいた頃はずいぶん苦労したが、  
今ではこちらの人よりも少し速いくらいのスピードで火がつけられるようになつた。

火をつけ湯を沸かし、湯飲みに湯を入れる。

そして、お茶つ葉の入った急須戻し、再度注ぐ。  
これがおいしいお茶の入れ方である。

黄緑色にきれいに染まつたお茶が入つた。

「やつたーー！今日も成功！！

・・・それにしてもあの人誰だろ？？」

竜馬の隣の青年を結は思い出した。

トコトコ、お茶の入つた湯飲みのお盆を持つて、

結は部屋の前に立ち足で襖を開けた。

スパーーンといい音を立てて襖が開く。

青年が何事かという顔をしている。

「跡、お前。足で開けるのはよした方がいいぞ・・・。」

苦笑しながら半平太が言つ。

「はあ～い。」

結が小さくなる。

すると、結の持つているお盆に手が伸びてきた。  
結はすかさずその手の持ち主に蹴りを食らわせた。

「竜馬兄さん、先生とお客さんが先でしょ！！」

「あたたた。ほがーに怒らのうても・・・・・。」

竜馬が（#）ブツブツ言つてるのを結は完全無視をする。

「先生どうも！」

お茶を結が半平太に渡す。

「ありがと。」

・・・本当に跡はお茶を入れるのが上手だな。」

「竜馬兄さん、頼もどうぞ！..」

「ありがと。」

「Thank you!!」

部屋にいた全員が頼に目を向ける。

「に、兄ちゃんととのありがとつて言つ合ひ言葉だもんね・・・？」

「あ、あ～～そ、そなんだよね！..」

頼と結が慌ててホローする。

「そりいえば、結と頼には紹介してなかつたな・・。」

半平太が青年の方を見ながら言つた。

「以蔵君。いらっしゃへ来なさい。」

「は、はい。」

(いそづくん？イ・ゾ・ウ？

えー！……あの人切り以蔵で知られる岡田以蔵！  
まさか、この人は思いもよらんかった！！）

結は半平太の横でこちらに向き直つた以蔵を見た。

（素朴そうな人だな・・・。

それに忠実そうな目を持つている。

スゴイぞ！私！  
よしコレクションを・・・。）

「以蔵、これが前話した時内結と頼だ。」

「以後御見開きを。」

「何卒よろしく。」

結と頼が頭を下げる。

「岡田以蔵という。以後御見開きを。」

すかさず、結の悪い癖が炸裂する。

「あのー。これにお名前書いていただきたいのですが・・・。」

口は優しいが半強制的に筆を渡した。

「はあ。」

以蔵は不思議そうな顔をしたが何も聞かずにスラッシュと書いてくれた。  
(字、うまくない・・・。以蔵さん。)

その時、寝転がっていた竜馬が不愉快そうに言った。

「以蔵にゆつて、わしにや書けつて言わないがか・・・。  
結がニヤリとする。

「何？竜馬兄さん・・・。書きたかつたんだーー！」

「ほがなことはないきこーーー！」

顔を赤くして竜馬が言つ。

「いいよ。兄さんも書いてよー。」

別に結、竜馬をいじめてノートを渡さなかつたわけではなく、時間無くて忘れてしまつただけであつたのだった。

「時間、無くてさー」「めんね！ほりよつと」

「ああ。」

ノートが竜馬の元にダイブする。

竜馬もさらさらと書き、結に渡した。

結はそれを受け取ると開けはなつていた襖の外に出て、縁側に腰掛けた。

空には

サンサンと

太陽が輝き、

心地よい暖かさを『』える。

地には

それに

呼応するかの如く、

土筆があちこちから出でていた。

これから何が起ころるのだろう？

そして何を知るのだろう？

きつと新しい出会い

新しい発見

ただ春の夜に咲く夢桜のよつて散つていぐ

志士たちの

後ろ姿を



## その8 櫻桜（後書き）

「おんなじ……」

私の一身上の都合により、終わらせてしまった……

もしかすると、復活をやるかもしてくれません。  
本当に駄文でも楽しんでくださいました皆様。  
本当にありがとうございました（――・）

「」意見、「」感想頂けるといれしにです！

### 結の幕末サインコレクション

- NO.2　岡田以蔵（土佐）
- NO.3　坂本竜馬（土佐）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4397a/>

---

ただ春の夢のごとし

2010年10月9日15時33分発行